
ギリシャの異世界

しの山 あや子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギリシャの異世界

【Nコード】

N2957P

【作者名】

しの山 あや子

【あらすじ】

父のアトリエで探し物をしていた主人公・優は、突然に抜けた床に落ち、秘密の部屋を見つける。そこにあつたギリシャ神話に出てくる神々を描いた絵が動きだし、優はその中の世界へ入っていく――

ギリシャ神話の世界をもとに描く三人の選ばれし「王」の頂点を決める争いに「鍵」となるのは日本からやって来た優だった……
異世界トリップファンタジー――

*このお話はギリシャ神話を織り交ぜながら、作者の独断と偏見で作った空想の人物設定や物語になっています。物語が進むにつれ次第に隠された真実が明らかになっていき、主人公達は自分たちの運命に翻弄されながらも、一つの目標に向かって進んでいきます。コメディチックに描いたり、時々作者の伝えたいと思う事などをシリアスに書いたりできればと思います。物語はまだまだ始まったばかりですが、よかったですら見てあげて下さい^^

第一話 異世界への入り口

夜が更け、コウモリたちが騒がしく蠢き夜空を不吉に舞い上がる。車のライトが次々と通り過ぎる道路の前に決して広くもない公園があった。その向かいに、二階建ての古い家がある。離れに小屋がポツンと建っていて、まだ明かりが灯っていた。

さて、離れの小屋で何やらこそそこそと探し物をするはこの物語の主人公――

前田 優（maeda yuu）である

彼女は小柄な身なりで黒髪ショートヘア、大きくまんまるな目と、まったく平らな胸が特徴的だ。

内向的でおとなしく、あまり目立つ事が好きではない。服装もほとんどがTシャツにジーンズといった色気もない格好をしている若干16歳の少女だった…

…いやしかし、彼女はこんな夜中にいったい何をしているのだろうか――？

「うーん、無いなあ…」

難しい顔をして、優はそこら中の引き出しを開ける。

「確か、…ここら辺にあったよね」

この離れはもとも父のアトリエとして使っていた場所だった。だが、優の父親は去年、突然失踪して、この家を出て行ってしまったのである。置手紙も何もなかった。母も妹の春香もかなりショックを受けていたのを覚えている。だけど私はというと、そうでもない。何故なら私はこの家の子では無いのだ。母方の姉さん夫婦が事故で死んでしまつて当時まだ赤ん坊だった私はこの家に引き取

られることとなった。

だがこの家での生活は決して楽しいものではなかった。虐待を受けたわけではない。むしろ、その反対だ。教育熱心な育ての親は、私になんでも理想を押し付けた。英会話・そろばん・ピアノ・バレエ・塾など…それでも3年前に私に妹が出来てからは、その執拗なまでの愛情はすべて妹にそそがれ、私は随分楽になった。だけど、父だけは私に厳しかった。

父は日本でも数本の指に入る程の有名な画家で、私はそんな父に絵の才能をかわれ毎日のように描きたくもないデッサンや油絵を描く日々が続いていた。そのおかげか、私の絵はかなり上手くなり、模写で有名な顔をそっくりに描いてみせると、まるで写真を見ているようだとかラスでも評判になるほどだった。

* * * *

ちよつと複雑な家庭事情を語ったところで…

「あつた」

優は、目的の油絵具を見つけ出した。父が失踪してから、見るのも嫌だった…明日の美術の時間で使わなくてはならない。私は仕方なく、埃をかぶったそれを持ち、自分の部屋へ戻ろうと後ろへ一歩足を引いた。

カタン――

(…?)

小さな物音に私は下を向く。何かを足で踏んだような感触があっ

た…

「あら、この離れももう寿命なのかな…」

見ると、優の踏んだところの底板が外れてしまっている。築60年は建つであろうこの家は、今の両親のひいおじいちゃんが作ったといわれている古い家だった。何度かリフォームはしているそうなんだが、さすがに土台自体がもう駄目なんだろう。

優は剥がれた板を手で引っ張ってみた。こういうものは不思議と触りたくなってしまうたちなのだ。優が引っ張ると、板がカコンと外れた。

（あ……。お母さんに怒られるな…）

そんな事を考えている優…

だが次の瞬間、信じられないほど大きな物音と立てて部屋全体が揺れ始めた――

ゴゴゴゴゴゴ……

優の視界が小刻みにぶれる…

（え…な、地震……？）

その振動で、取れた板の周りから次々と板が外れていく…見る見るうちに優の足場がなくなり、落ちていく板と一緒に優も下へ落ちて行った――

「ちょ、何！？きゃーーーーっ」

一人混乱する優。顔はすっかり青ざめ、恐怖を浮かべてひんやりとした汗を流した。優の叫び声が数秒続き、それからイタつと言って優は地面に尻もちをつく。

「痛く、いっもう、何なの」

ヒリヒリとするお尻を抑えて、とりあえず着地したことに安どのため息がでた。優は落ちてきた穴を見上げた、結構深い…小柄な優には這い上る事は不可能のようだった。

「何、ここ…」

次に視線を落ちた部屋へ移した。見るとそこは…アトリエと同じくらいの広さの部屋で、壁一面に神秘的な絵が描かれている。

「これって…見た事あるな。確かギリシャ神話に出てくる神々だ——」

父から美術史を教えてもらっていた優は、それがイタリアのルネッサンス期に画家たちによって良く描かれていたギリシャ神話の神々だという事が分かった。

正面にはオリンポス十二神。左の壁には美しい女神や精霊達。右の壁には神々の子供である英雄達。後ろの壁には恐ろしい怪物たちが描かれていた。

ポワン——

優が絵に集中していると、床が突然光り出す——

（今度はなに——！？）

優の周りに魔法陣のような円が青いチョークで書かれていて、小さな文字が動いている。優には読めないが、たぶんギリシャ文字で書かれているのだろう…。それがひとりで動き、文字が前後に組み立てられていくようだ。優が右へ左へせわしなく視線を動かしていると、文字はあるところで止まった。

すると、今度は周りの壁がぐるぐると回り出す。

「うえ…えええ…」

声にもならない呟きを口にする優。何が何だか理解できない。次第に、体がグニャリと歪んでいき…。頭がぼんやりとして振り子のように揺れる…

見えない力に逆らえず、…わたしはとうとう、意識を手放した―

第一話 異世界への入り口（後書き）

亀更新です……

月に1、2回とかで…

暇なときにも読んで下さい^^

第二話 神話の世界へ（前書き）

大昔…人々はこの地上の至るところに神々や精霊が存在し、神々はオリンポスの山々や天の彼方に住んでいるとされていた。

それらの伝説は『吟遊詩人』（詩曲を作り全国を回って歌う人々）によって広められていた…

第二話 神話の世界へ

ヒュオオオオオ……—

激しく吹雪が吹き荒れている。雪が深く積もり、遠くの方まで険しい山々がそびえ立っていた……ここは、ヘリコーン山と呼ばれるギリシャ神話で物語の冒頭によく描かれる場所である。何も分らないまま異世界トリップしてしまった優。

彼女に一体…何が待ち受けているというのでしょうか——

* * * *

優が絵の中に吸い込まれて着いた場所は、険しい山々が連なる白銀の世界だった——

(さ…さむ…っ)

目を開けるとまず寒さが優を襲った。吹き荒れる雪に前はよく見え、強い風に耳を塞がれ、寒さで体は芯まで凍るように冷たく冷える。息をすれば肺まで凍ってくるので、口を手で押さえた…がしかし、服装は薄着のままだったので今に凍え死んでもおかしくない状況だ…

「ダメだ…眠くなってきた」

優は急激な寒さに体を震わせて言う。数秒と経たずに優は自分の体の機能が低下していくのを感じていた。頭に膜が張り、瞼は重石が乗った様だ…

「もう…無理…まさか私、こんなに簡単に死んじゃうの…？」

そう呟いた私に、ヘリコーン山の吹雪は容赦なく吹きつける。私は無我夢中で眠い頭をふるい起こし、雪を掻きわけて進んだ。

「ハア…ハア…」

なぜ私は今こんなところに居るのか理解出来るわけもないが、今はそんな事を優著に考えている暇も無さそうだ。第一、あのアトリ工で床が抜けた時点でもう頭は追いついていなかった。何となく予想が付くことと言えば、ここはきっと父が描いていたギリシャ神話の世界なのだろう…実に信じがたい話ではあるが、夢だと思い込もうとしてもこの体に直接訴えかける寒さで、嫌でもこれは現実だと思ひ知らされる…

（それよりも、とにかくこのままでは本当に死んじゃう…っ）

優がしばらく寒さと葛藤しながら歩いている（…といっても雪が積もりすぎで歩くというか泳ぐのに近い…）と、さっきの場所よりも開けた丘に着いた。そのすぐそばに洞窟が見える。

「よ、よかった…あそこへ入れば少なくとも強風に煽られる事は無い…」

だが、この危険が多く潜むヘリコーン山はそんな甘いものではなかった――

* * *

私は半ば雪に埋もれた体で、恐る恐る洞窟へ入った。洞窟の中は意外に狭くてジメジメしている。小柄な優でも頭が付くくらいの大きさだ。奥は真っ暗で見えないが、吹雪の音は小さくなり、優はやつと一息つくことが出来た。

ピチャ…ピチャ…

「…」

安堵の息を漏らしたのもつかの間、真っ暗な闇の奥から、水滴の落ちる音が一定の間隔をあけて聞こえる。

「こ、怖いよう…」

それは妙に静まった洞窟に不気味に感じ、私は嫌な予感がして、体を緊張させた。

ドゴゴゴゴゴ…!

(!!)

外から爆音がした。

「きゃあああああ…!!!!」

振り向くと津波のように雪が洞窟まで流れ込んできて、優は抵抗する間もなく飲み込まれる。優の体ごと雪が洞窟の奥へと流れて行

つた――

「いたたた…」

奥に進むと洞窟は広くなっていて、頭を強く壁にぶつけながら流された私は、起き上って目の前を見た。

「ひ…っ」

私は思わず悲鳴をあげる。そこには優の体の五倍はあるであろう巨大なライオンがねっ転がっていたのだ。

「グルルル…」

寝そべっていたライオンの顔が持ち上がった。金色のたてがみに立派な牙と爪。胴体に黄金の鎧をつけている。そのすぐそばには、巨大な盾と槍が置いてあった。辺り一面に強い獣臭がたち込める…

何より宝石のようなブルーの眼が優を静かに見つめていた――

* * * *

「…」

いつまでこうして見つめあったらだろうか…

優とライオンは動かずお互いを監視するように見ていた。外に逃げ出したいのはやまやまなのだが、さっきの雪崩で後ろの入り口は完全に塞がれてしまっていた。

「ガウ…」

両者、冷戦状態を最初に打ち破ったのはライオンの方だった。起き上り、洞窟が狭いので半ば這うようにして優に近づく。

「い、いやあああ!!」

もう駄目だと思った優は、張り詰めた心を一気に放ち、精一杯の声を張り上げた。ライオンはその高く劈くような声に思わず耳を塞いで顔をしかめた。

「うおおおっふざけるなお前っ耳が痛いぞ!!」

「…へ」

目の前にはライオンがいる。優を恨めしげに睨んでいて、さっきの声は確かにこのライオンから聞こえたようだ。不意を突かれた私は叫ぶのを止める。なかば、半信半疑でライオンに声をかけてみる。

「あの…ライオンさん？」

「…俺の名前はダンだ。コレーアンドイド国の3代目王子、コレー・フジリアング・ダン…先に言っておくが、俺はこの世界の者では無い」

やっぱりしゃべるライオンのようだ…

「じゃあ、あなたも異世界から来たの…？」

コレー何とかの国は聞いたこともないが、彼も私と同じように異世界トリップでこの世界へやって来たようだ…ダンは軽いため息をつき、口を開く。

「その様子じゃあ、お前も異世界のものか」

「は、はい」

巨大なライオンに見降ろされ、私は額に汗がにじむのを感じながら答えた。

「…にしても随分と薄着なのだな。ほら、その足を見せてみる」

そう言っただんは前足で優の右足を突っついた。優は襲われると思ひ、身を縮める。

(……あれ)

痛みどころか、何も感じない。だんに触られたはずの足の感覚が完全に麻痺しているようで、私は青ざめる。だんは、神妙な面持ちで黙って優の足をまじまじと観察した。持ち上げたり、つねってみたりするだんの行動は、ちょっと人間臭い…

「…凍傷しかけているが、まだ何とかなるだろう…まず、水をかけてそれからゆっくりと溶かすんだ。ほら、俺の水筒の中の水を使え」

そう言っただんは腰にかけた水筒に手を伸ばした。

「……っ」

優は反射的にびくつと肩を震わせ、後ろへ体を反る。

「…安心しろ。確かに俺は肉食だが、お前は食わない」

ダンはそんな私に、呆れたように言い放った。水筒の栓を抜き、ドバドバと優の両足にかける。

「あ、あの…そんなに使ってしまったら、あなたの飲む分が無くなるんじゃない？」

少し警戒を解いた私に、ダンはニヤリと笑った。

「ふん…バカ娘。今はそんな事気にしている場合じゃないだろう」

そう言っただんはすべての水を優の足にかけてしまった。こんな山奥で、何が起こるか分からないのに他人のためにこうも簡単に命を繋ぐ為の大事な水を使ってしまうなんて…

ダンは鎧を脱ぎ始める。たてがみと同じ輝くような金色の毛皮が露わになった。ダンは寝ころび優の腕を引っ張って自分の傍に置いた。

（ふわふわで…温かい）

「まあ、これで少しはましになるだろう…まさか、この体が役に立つとは思わなかったがな…」

「…え？」

最後の方の言葉はダンが小声になったため、私には聞き取れなかった。

「いや、何でもないさ」

ダンはそう言ってクスリと笑う。

「さあ、吹雪が収まるまで…もう寝よう」

「はい…」

この世界に来てから、やっと落ち着けることに私はこれまでの緊張の糸を解した。ダンがいなければ今頃私は無事では居られなかっただろう…

（どんな、国から来たんだろ…）

私は、そんなダンにかなり興味を抱いた。そして、静かに落ちる闇に、その身を沈めていった――

第三話 泉の精霊達

* * * *

駆けていく、駆けていく、私がペガサスに乗ってヘリコーン山の野花の咲く丘を下っている。

その先には、ベレー帽を被った羊飼いの男の子と、ダンが崖から同時に落ちるのが見えた。

優達は、勢いよく崖から飛び、ベレー帽の男の子の腕を掴んだ……

* * * *

「…はっ」

噴き出す汗と共に、優は目が覚めた。乱れる呼吸は収まらず、息が浅くなっていくばかりだ。

「ぜえ…ぜえ…」

私は起き上って手で胸を押さえる。周りを見渡すと、ダンの姿が見当たらなかった。雪で塞がれていた出口に小さな穴が出来ていて、盾や槍も無くなっている。

（そっか…ダンさんもう出ていったんだ。お礼もろくに言えなかったのに…）

優の体はどんどん上昇していった。どうやら風邪を引いてしまったようだ。無理もない、あんな吹雪の中歩いてたんだから…とりあえず、優は床にふたたび寝そべった。

ボココ…

(!!)

「だ…誰!？」

雪が崩れる音がして、私は入り口付近に目をやった。金色のたてがみが現れ、それから透き通るように綺麗なブルーの瞳が私と目が合った。それは黄金の鎧を着た、ライオンのダンだ。

「ダン…!!」

ダンは苦しそうにしている優を見るなり、慌てて寄って来た。

「お前つすごい熱じゃないか!!」

そう言つてダンは私のおでこに前足を当てた、まるで人間の母親が子供を心配するかのように、ダンの驚いた顔が優を覗いている。

「ふふ…ダンさんって、やっぱり人間みたいだね」

「ばか娘、無理にしゃべるんじゃない」

ダンが来てくれて、優は正直安心していた。きっと私一人ではこの山を降りるのは無理があったから…

「とりあえず、外に出よう」

ダンは優を軽々持ち上げ、小さく開けた穴を入れて行った。

「え…でも外は吹雪が」

と、私は言いかけて口をつぐんだ。そこには青々と草が生い茂り、優しく温かい風が吹いている。

「…驚いただろう、まあ無理もないか。山の天候は変わりやすいと言うが…これはな、西風のゼフュロスが花の妖精フローラを連れて、春を運んで来たんだよ」

「春を…運んできた？」

キョトンとする優に、ダンは両方に生えた牙を見せて笑った。

「神々の仕業さ」

* * * *

しばらくの間、ダンに担がれて私は山を下っていた。真っ白な小鳥が周りを飛んでいる。昨夜の吹雪が嘘のように、穏やかに時間が流れているように感じた。足場は次第に緩やかな斜面に変わり、大きな樹木がちらほらと見えてきた。

「…ウウ」

景色を眺めていると、ダンが立ち止まり、どこか一点を見つめて唸った。優も警戒態勢に入り、ダンの広い背中から森の方を覗きこむ。チラチラと影が見えて、木々や草むらが揺れている。なにかがあそこにいるようだ。ダンは私を降ろし、盾と槍を手に持って構えた。

「ウオウウ!!」

(!!)

草むらから牙が異常に伸びた狼が3頭同時に襲ってくる。灰色の毛に、尻尾が馬の様な狼たちは、よだれを垂らし、機敏な動きでダンに飛びかかった。ダンも雄たけびを上げ、その巨体を大きく広げて威嚇する。

「…キャンッ!!」

その威嚇にビビった一頭が逃げだした。

「…ったく、面倒くせえ奴らだな」

ダンは軽く槍を振った。すると、その風で二頭ともがいとも簡単に高々と打ち上げられ、遠くの崖を落ちていった。狼といっても大きさは熊ぐらいあったのだが、顔の周りに飛ぶハエを払うかのよう

にダンは吹き飛ばしてしまったのだ。

「…」
その様子をあんぐりと口を開けて見ていた優は、ダンと目が合うと興奮したように抱きついた。

「凄いつ強いんだね!!ダン!!」

「当たり前だ。俺は自分の国でもかなり武術にたけていたからな、腕には自信と誇りがある」

…そういえばダンの持つている鎧や盾や槍には、どれもライオンの絵を描いた紋章が付いてある。これはダンの国の武装なのか。

「おい、あの奥に泉が見えるぞ」

「わあ、本当だっ」

ダンが見つけたのは、森に囲まれてある丸い楕円型の泉だった。透明な水に緑色の苔が岩にくっついていて、底が見える。腕の半分くらいまでの深さだ。日が当たり反射してキラキラと光る水面が、優の顔とダンの顔を綺麗に映し出していた。

* * *

まるで鏡の様に綺麗に写った自分の顔を、じっと見つめる優。

「青くて、ひどく疲れた顔…」

泉に写った顔は、ショートヘアの黒髪に寝癖が付いていて、頬が少しこけ、唇も肌も乾いている。仮にも女の子なので、そんな状態の自分を見て、がっくりと肩を落とした。

（はあ、とりあえず顔を洗おう…）

そう思っ私は泉に手を伸ばした…すると。

パシャッ！！

泉の中から複数の小さな手が伸びてきて、優の手を掴んできた。

「きゃああっ」

優は驚き声をあげる。いきなりの事でかなりびっくりした。

泉から、泡が出て一緒に小さな生き物が現れた。その子たちは、ビー玉の様な透明な目をいっていて鼻は尖っている。リスぐらいの小さな体に、表面はカエルのあの湿ったような緑色だ。この子たちはもしかして…この泉の精霊達？

何人もの精霊が口々にしゃべりだした。

「こら、お前たちっ勝手にあたいらたちの泉に触るんじゃない。泉を汚したら許さないぞ」

「あ、ごめんなさい。ちょっと顔を洗おうと思ったの…」

すると、精霊達は驚いたようにお互いに顔を見合わせた。そして、一番目がきつい精霊が優に話しかける。

「あんた、あたい達の言葉が分かるの？」

「え？」

優は、ダンの方へ振り向いた。ダンも驚いた顔で優を見ている。

「…おい小娘、俺にはちっともこいつらの言葉が理解できんぞ。いっつもキーキーと鳴いているようにしか…」

ダンは首を振りながら、精霊達を指さした。

「…そんな、普通に話ししてるじゃない」

どうやら精霊の声が聞こえるのは普通じゃないらしい…周りが戸惑っている様子に、私も何が起こったのか分からなかった。

「すごいすごいっあたい達とお話できる人間は初めてだよ。お姉ちゃん」

「…そうみたいね」

精霊達がはしゃいでるのを見て、私もため息とともにフツと笑った。

「なあ、お前精霊としゃべれるなら、この泉の水を飲んでもいいか聞いて見てくれないか？昨日からのどがカラカラなんだ…」

ダンがそういつて舌をだして首を抑える。私はコクンと頷き、精霊達に問いかけた。

「ねえ精霊さん、ここのお水を私たちに分けて欲しいの。いいかしら？」

精霊達はお互いに顔を見合わせ、何やら言い合いをしてから、全員で一緒に首を縦に振った。

「ありがとうみんな…ダン、精霊達が飲んでもいいってっ」

「おお、それは助かるぜ…」

ダンは直接泉に口を付き、喉を鳴らして飲み始めた。私は、ここまでずっとダンには迷惑をかけてばかりだったので、少しでも役に立てて、すこしほっとしたのだった。

第四話 うわさのペガサス

「お姉ちゃんの方が、随分弱ってるみたいだね。ねえ、あんたあれ持ってきてよっ」

「はい！！姉さんっ」

気の強そうな女の子は妖精たちの親分的な存在らしい。みんなより一回り小さい妖精が、兵隊並みにビシッと気をつけをして泉の中に潜った。…と思ったら、すぐ水面に顔を出し右手に小瓶を持っている。

「これよ。ほいっお姉ちゃん」

そういつて気の強い妖精から差し出されたのは青い液体の入った小瓶だ。優はそれをまじまじと観察する。

「これ、なんの液体なの？」

「…まあ、細かい事は良いじゃないさっこれ飲んだら回復するからさあ、飲んで」

（本当に大丈夫なのかしら…）

疑いながらも、私は一口飲んでみた。

「おいしい…」

優の顔がぱあっと明るくなった。体が暖まって、足の痛みも治ま

ってきた。ダンが私の足を摘まむと、思わず痛いと叫んだ。ダンも嬉しそうに笑う。足の感覚もすっかり元に戻ってしまったのだ。

「凄いつなぜ!？」

私は興奮して妖精を見た。妖精たちはみんな、苦笑いをしている。

(…?)

「あのさ、飲む前にはちよつと言いつらかったんだけどね…その水、実はペガサスのお尻から出たものなのさ…」

気の強そうな妖精は優に申し訳なさそうに言った。

「う、うえ…そんなつ酷いよ!!おしっこですって!？」

私は今飲んだものを手をつ込み、吐こうとする。涙目になりながら、妖精を恨めしげに睨んだ。ダンは顔をゆがませ、舌を出す。優を気遣うように、背中を撫でてやった。

「だ、だけど、効果は確かなのっだから…」

「普通の泉の水だって十分効果はあるわっなにもそんなもの飲まなかつたって!!」

妖精たちはお互いの顔を見合わせ、首を振ったり、優に怒ったように両腕を上げたりしている。せっかくの妖精の好意を受け入れなかったのが癪に障ったらしい…

「みんな、静かにしてちょうだいっあのね、そうはいつでも優の傷

はそれほど酷かったのよ。泉の水では完全には足は動く事は出来なかったの…あたいの言葉が分かるなら、あたいの言葉を信じてよ」

優は深刻な顔を浮かべ、少し考える。

「…分かったわ。信じる」

私がそう言うと、気の強そうな妖精はにっこりと笑った。周りの妖精たちもそれぞれ満足げな顔をして喜んだ。

「でも、どうして妖精さん達は…その…ぺ、ペガサスのお…しっこを持っているの？」

優は、時々言葉に詰まりながら何とか言った。

「あら、簡単な事さっ…この泉はね、ペガサスが足で蹴って、その穴に泉がわき上がって出来たのさ。そしてあたい達は、この泉から生まれたの」

「つまり、ペガサスがあなた達の親なの？」

「…まあ、そんなものよね」

優の話を聞いていたダンが口を開く。

「そいつはいつもここに来るのか？」

「…なんだよライオンっあたいは優じゃないと話さないよ!」

ダンも妖精たちの言葉が分からないので、優の顔をうかがう。

優は思わず苦笑いを浮かべた。どうやらダンは妖精には人気が無いようだ。

「おい小娘、こいつらの言葉は分からないが、何かブーイングを受けてるのは分かるぞ。なんて生意気なガキどもだ」

ダンも妖精たちを睨みつける。野生の威嚇する声を出し、妖精たちをビビらせた。

「まあまあ、私が聞いてみるから…落ち着いてよ、ダン」

私は、妖精たちの方へ体を向ける。

「ねえ、それでペガサスはここに現れるの？」

今までダンを睨みつけていた気の強そうな妖精が優に視線を向けた。

「ああ、お月さまが顔を出すと同じくらいにいつも空から飛んできて、ここの泉で体を休めているよ」

今の説明を、優はダンにしてやる。するとダンは顎に手を当てて考えるように沈黙した。

「…もしもの話だが、ペガサスを仲間に出出来ないだろうか…ペガサスっていえば馬に羽の生えた生き物だ。飛べるとなると、この先の旅での交通手段として大いに役立つぞ」

「ペガサスをを連れてくつてのかい？…それはどうだろうねえ。役に立つとは思えないけど…」

気の強そうな妖精は渋い顔になった。

「どうして？」

「一言でいえば、ドジなんだよ。あいつは」

自分であるはずの精霊から、この扱い。なんだか不安になってきた。

* * *

すっかり日が沈み、夜になった。ペガサスはもうすぐ現れるはずだ。人がいるとペガサスは空から降りてこないらしいので、優達は精霊達に誘導され、森の茂みに隠れて待つことになった。やがて羽音がして、夜空の月にかぶさるように、ペガサスが舞い降りてきた。その姿は真っ白で、実に優雅に羽を動かしている。ブルーの瞳がきらきらと輝いていた。

「…来たぞ」

ダンは息をひそめて呟く。私は不安げにダンに問いかけた。

「でも、どうやって仲間にするの？」

「簡単だ。俺の国では、戦いに負けた奴は一生をそいつに捧げる奴隷となる。ペガサスを叩きのめして、言う事を聞かせるんだよ」

それを聞いた私は慌ててダンの体を押さえつける。

「そんなっジャイアンじゃないんだからっ力でものを言わせるなんて野蠻よー!」

「はあ? ジャイアン... ってなんだ。止めるなよ、とにかく捕まえちまえばいいんだ」

しがみ付く優をダンはうるさい蚊を払うかのように払いのけた。止める優に構わず、ダンは泉の水に口をつけるペガサスに襲いかかる。

(!!)

ペガサスはすぐに異変に気付き、逃げようと羽を広げた。ダンはすかさず槍でペガサスの背中を叩く。ペガサスは悲鳴と共に、床に叩きつけられた。その様子に、妖精たちは驚いて騒ぎ出す。

「止めてっ」

私は精一杯叫んだ。ダンは槍を構え、倒れているペガサスの胴体目指して突き刺す。

「ヒヒーン!!」

ペガサスが叫び、瞬時に体が小さくなった、優の二倍くらいあった体は、ポニーぐらいの大きさだ。ダンの突いた槍は空振り、ダン自身も勢い余って転げる。

「野郎っ変化できるのか!!」

ダンはギラリと鈍く光る眼でペガサスを一睨みし、また攻撃の態

勢に移った。

「降参よ！！降参だつてばっダン止めて！！！！！」

優はダンに後ろから抱きつき叫んだ。ダンは優に顔だけ向ける。

「何、降参だと…そう言ってるのか？」

優は勢いよく頭を縦に振った。見ると、小さくなったペガサスはうずくまり、僅かに震えている。そしてお尻から例の青い液体おしっこを出していた。

「なるほど。これで精霊達がペガサスのおしっこを持っていた理由が分かったな」

ダンは眉を広げ、ため息交じりに言った。そして持っていた槍と盾を地面に落とす。ペガサスはそれにほっとしたのか、涙目になった目を此方に向け弱々しく笑った。

「とんだ弱虫だな。こいつ」

* * *

シクシク…シクシク…

ダンに襲われたショックからか、ペガサスは一向に鳴きやまない。気の強そうな精霊が、ほらね。と言って肩をすくめた。

「怖い目にあつたんだから、怯えて当たり前でしょ！！ダンったら…」

私はダンを睨みつけた。ダンは、全く反省する事無くそつぽを向く。私は鳴き止まないペガサスを、優しくなだめ、事情を説明した。やさしい優に、ペガサスも次第に心を開く。

「おねいさん達、旅をするの…でも、目的地はあるの？」

「それは…」

確信をついた一言に、優達は言葉が出ない。異世界から来たものの、帰り方なんて見当もつかないのだ。黙りこんだ優達に、ペガサスは思いついたように言った。

「そうだつヘシオドスなら何か知ってるかも！！」

「ヘシオドス？」

優の放った言葉に、ダンは反応した。

「その名前、聞いたことあるぞ。確か羊飼いをしてる吟遊詩人だ」

「吟遊詩人って？」

優の質問に、ダンは牙を見せて大きく口を開く。

「歌でギリシャ神話を伝える詩人の事だよ。おい、ペガサス。案内しろ」

ペガサス（略して）ペガは、フンっとそつぽを向いた。どうやらペガにもダンは嫌われてしまっているようだ。

（ライオンって確か動物の王様よね…その威厳が裏目に出てるのかしら…）

「あの…お願いっぺガサスちゃん」

私がお願いすると、ペガはにつこりと笑って快く承諾した。ダン
は顔をしかめて怒りに体を震わせる。

「この小便野郎が」

イラつくダンを何とかなだめて、私たちはペガサスと共にヘシオ
ドスの元へ向かう事となった。こうして、ようやく目的に向かって
進み始めることになったのだ。

第五話 ヘリコーン山の住人

ようやく旅らしくなってきた優達は、ペガサスに案内され、吟遊詩人のヘシオドスの元を訪れる事となった。

主人公の優と喋るライオン、弱虫なペガサス。さて、そんな三人の前に次に訪れるものとは――？

* * *

すっかり夜も更け、昼間の獣達も寝静まった頃。ヘリコーン山の中腹に位置する辺りに、ポツンと建つ山小屋がある。二階建てで丸く切り取られた天窓から、月の光が差し込んでいて、煙突からは煙が出ていた。部屋の明かりも付いていることから、山小屋の住人はちょうど夕飯時なのだろうと予測できる…

その小屋の周りで、何やら不穏な動きをする者たちが蠢うごめいていた。人影は二つ。彼らは下半身が馬、上半身は人間で、それは神話でも有名な怪物だ。自分の体と同じくらいの長さの弓を持ち、その矢の先は火が付けられている。息を合わせ、二つの影はそれを構えると、一斉に山小屋に向かって撃つ。小屋に火がつき、炎となってたちまち広がっていった。

ボオオ！！

「うわあああ！！」

二つの影は悲鳴が聞こえても動じず、相変わらず二人揃って弓を構えている。数秒して、ベレー帽を被った小柄な少年が出てきた。

「…お前がヘシオドスか？」

「お前ら、山のふもとに住むケンタウロス族か…」

少年はせき込み、驚いたように二人を見た。小屋の炎の火が当たって、二つの影が照らされる。見ると、少年の体の倍近くあるケンタウロス達は、落ち着いた様子で少年に冷たい視線を浴びせていた。少年に声をかけたのは、無精ひげを顎に少し付け、黒髪で天然パーマの男だ。もう一人は、それとは反対に冷めるような白くてまっすぐな髪に、清潔感のある白い肌の男だ。二人とも、真っ黒な目をして極めて表情が無い。

その様子に、まだ幼い少年は体を震わせ、怯えていた。

「お、俺に何の用だ」

少年が問うと、今度は白い肌の男が口を開いた。

「何、簡単な事だよ…お前の羊たちを我々に渡せばいい」

「何だって!？」

少年が声を上げると共に、無精ひげの男が腰に付けた小型ナイフを取り出し、脅すように少年の頬に押し付ける。少年は真っ青になりながら、息も荒く僅かに首を振った。

「何、無理やりにでもそうさせるでよ」

そう言った無精ひげの男の眼がキラリと光る。ケンタウロスの喋り方は語尾に付ける言葉が独特だ。少年は抵抗するが、大きな体のケンタウロス二人に敵う筈もなく、体を引きずられて連れていかれ

てしまう。

「火の後始末はやっておいてくでよ」

「ああ」

遠ざかる無精ひげの男の呼びかけに、もう一人のケンタウロスが燃え上がる火を眺めながら答える。

「神よ…お許してください」

そう言つて男は頭を下げ、悲しげな顔をして祈るように目を閉じたのだつた。

* * *

一方、優達は暗闇の中…ヘリコーン山を下っていた。ダンは四本足で走っていて、でこぼことした足場も力強く進む。かなりスピードがあり、走るたびに鎧の金属がこすれる音がガシヤンガシヤンと聞こえた。その横で私はペガの背に乗って走っている。滑らかに走るペガの白い毛は、肌触りが良くて少し滑りそうになるが、乗り心地は最高に気持ちが良い。春の夜風を受けながら、私はヘリコーン山の景色を楽しんだ。

「おい、馬。俺も乗せろ」

「嫌だよ、ダンは重すぎて僕じゃ無理だね」

ふふんと鼻を鳴らしてペガは言った。ペガはまだ小さく、人間で言つと子供くらいなのだそうだ。大人になれば、もっと体も大きく

なるらしい。私からすれば、今のままで十分なのだが…ダンとはペガに鋭い視線を浴びせる。ペガは少し身じろぎして怯えるが、ちよつとは慣れてきたのか、顔を反らしてやり過こした。

「そんなに文句を言わなくても、ヘシオドスの小屋はもうすぐそこだよ」

ペガは顎を突き出し、森の先を差し示す。

「ペガはヘシオドスとはどういう関係なの？」

私の質問に、ペガは目を中に漂わせ、考えてから明るく答えた。

「ヘシオドスはね、小さい頃から僕の面倒をよく見てくれる友達なんだ。よく一緒に遊んでるんだよ」

「…は、言葉も分からないのにどうやって遊ぶんだよ」

楽しそうなペガにダンが嫌味を言う。そんなダンを恨めしげに人睨みするペガを、私は何とか笑顔でごまかし、ペガの答えを促した。まったくこの二人の会話は危なっかしくてひやひやする。優はひそかにため息を漏らした。

「ううん。ヘシオドスは僕の感情が分かるんだ。『靈感』を使うんだって」

「そうなのっ!？」

驚いて私とダンはお互いに顔を見合わせる。

「俺も吟遊詩人とは会った事が無いから分かんが、神々の言葉を理解して、人々に伝えるそうなんだ。その能力が‘靈感’なのかもしれないな」

ダンは唸るように喉を鳴らし、何か考え込んでいた。

「着いたよ」

(!!)

ペガの一言で一齐に前を見上げる。三人の目線の先には、森の陰から覗く山小屋が見えて、ダンはやっと着いたか、とため息をつき山小屋へ走って行った。ペガと私もそのあとを追う。

…だが、三人が見たのは山小屋の形をかるうじて保った、ほとんどが黒い炭の塊だった。これはただ事では無さそうだ。ペガはそれを見て、悲しげな泣き声を一つ、山に響かせた。

* * *

ペガは目に涙をためて半壊になった小屋のドアに体当たりする。ドアは簡単に崩れ、部屋の中は家具が壊れ、ベッドが置いてあったであろう場所も分からないほど、酷い有様だった。優とダンも小屋の中の様子を見て顔をしかめる。

「…小屋が全焼してるのに、周りの木や草はまったく被害が無いのね。という事は、ただの火事ではなさそう…誰かが故意に山小屋を焼いて、周りの森を焼かないように火を消したのかも…」

私が異変に気付くと、ペガはうなだれていた頭を上げ小屋を飛び出した。

「きつと、ケンタウロスだ！！奴ら最近この辺をうろつろしてて、妙だと思ってたんだよっ僕！！」

息も荒くペガがそう言っていると、ダンはそれを手を上げて制した。

「おいおい、証拠もないだろ」

「…けどっヘシオドスは僕の大切な友達なんだ！！きつと何かあったに違いないよ！！」

ペガは険しい顔でダンに詰め寄った。ダンはペガの首を叩き、落ち着かせる。

「どのみち、もう夜も遅い時間だ。これ以上動くのは危険だし、今日はもう寝ようじゃねえか」

ダンの意見に、私も頷く。ペガはいったん首を横に振ったが、ダンの説得に不満を言いながらも、今日のところは諦めてくれた。山小屋で何とか休めそうなので、部屋を中心にペガとダンの間に挟まれ、私は眠りにつく事になった。

「ああ…体を洗いたいわ」

一人嘆いた言葉に、ダンは私を静かに見降ろす。息を漏らすように、少し口を開けて笑った。その表情は人間で言う頬笑みのようで私はライオンであすはずのダンの顔が一瞬、人間の男に見える。

後ろでは、あれだけ駄々をこねていたペガの寝息が一定の間隔をあけて聞こえだす。ダンの顔を不思議そうに見ている私に気付いて、

ダンは眉を寄せて視線をそらせた。

「なんだ小娘、人の顔をじろじろ見るもんじゃねえぞ。バカ」

相変わらずの口の悪さに内心苦笑いして、優は謝る。

「ダンは、前の世界ではどんな人だったの？」

「…」

私の問いかけにダンは目を閉じて黙り込んだ。

（あれ、もしかして寝ちゃった…？）

しばらく目を開かないダンに私がそう思った時、ダンは天井を見上げて口を開いた。

「俺は、罪人だ。何人も人を殺し、そして大事な人を守ることが出来なかった…」

「…ダン」

いつもの自信に満ち溢れたダンの瞳が、今は自分の記憶にある何かを見て悲しげに揺れていた。何かに怯えているような…そんな儚げな表情をするダン。私は、ダンの腕を抱きしめた。そんなダンを見ていると、胸の奥が締め付けられるように痛んだのだ。ダンはしがみ付く優の黒い髪を優しく撫でる。

「なんだ、生意気に慰めようとしているのか…」

「ごめんね、ダン。つらい事を思い出させてしまった」

「ふん…どうってこと無い…」

「…私はダンに救われた。ダンは私にとって命の恩人なの」

ダンはため息を一つ付き、それから首を振った。

「小娘一人救ったところで俺の罪は数えきれない。…さあ、こんな話はもうやめよう」

そう言ってその大きな体を外側に向け、ダンは静かになった。

（…なぜ、そんなに悲しい目をするの…）

ダンの心の闇を、いつか知りたいと優は思った。こんなにいい人なのに、いったい何があったのだろうか…ダンは私に何か隠している。人間臭いその行動に、私は何か引かかるものを感じていた。やがて優も、ゆっくりと目を閉じ夢の中へ体を沈めて行った――

そして今夜も、優は変な夢を見ることになるのだ。

第五話 ヘリコーン山の住人（後書き）

ペガの言葉は優がダンに通訳するので、ダンにもペガの言葉が随時伝わっています。

第六話 ケンタウロスの敵地へ

* * *

ヘリコーン山のふもとに、小さな集落がある。周りには防壁が高く伸びていて、監視するケンタウロスが遠くの方を指さしていた。

その先には二人の武装したケンタウロスと、その背中にベレー帽をかぶった少年が意識を失った状態で担がれていた。

開いた門の中に小さな少年は入って行く――

* * *

「おいっ」

私は夢から覚めた。怖い顔をしたダンと、小さくなったペガが仲良く私の顔を覗きこんでいる。意識が戻った私は体の異変に気付いた。頭が異常に熱くなっていたのだ。顔から汗が吹き出し、息も上手く出来ない。

「私…どうしちゃったの…」

昨日もそうだった。同じように熱が出て、苦しかったのだ。ダン
は私の額に手を当てる。

「昨日と一緒だな。お前が夢で魔^うされていたようだったから、俺たちが起こしたんだ。これは、何かの病気なのか？」

「…うん、確かに昨日から変な夢ばかり見るのよ。妙にリアルで…嫌なものばかり」

苦しそくに顔をゆがめながら、私は言った。ダンはそれに低く囁き、私に問いかける。

「どんな夢だ」

聞かれて、私は一瞬チラリとペガの方を見る。ペガは優を心配して大きな瞳をうるませていた。

「…山のふもとにあるケンタウロスの集落に、ベレー帽の少年が連れて行かれる所だった…」

「それ本当!？」

ペガがそれに反応した。私が一瞬感じた悪い予感はずっと続いたようだ。ダンも驚いている。

「ケンタウロスのすみかの事を優が知ってるはず無いよね…もしかして優が見たのは…」

「予知能力か…」

言葉に詰まったペガを、偶然にもダンが引き継ぐように言った。私は認めたくは無いけど、この世界は何が起こってもおかしくはない…私は、未来を見てしまったのだろうか。

「やっぱり犯人はケンタウロス達だよ、あいつら、許さないぞー!ほら、早く助けに行こうよ!」

小さいペガはあわただしく翼を動かし、二人を急かす。ダンはい腰を起こし、鎧を装着し始めた。

「手掛かりはケンタウロスだけだ、山のふもとにあるっていう、その集落に行くぞ」

ダンの言葉に、私とペガはゆっくりと頷いた。

* * *

三人は急いでヘリコーン山を駆け下りる。優は周りの木々が、ぶれて通り過ぎて行くのを眺めていた。今朝の熱はしばらくするとだいぶん収まってきて、ダンとペガは心配して声をかけてくるが、本人は不思議なほどなんともない。

山を駆け下りる間、森にすむ獣たちが次々と襲いかかってきては一瞬でダンに倒されていた。どんなに大きな体をしていても、ダンは一撃で吹っ飛ばしてしまう怪力を持っている。私は感心する声を叫び続け、ペガは敵が来るたびにおもらしをしていた。まあ、おかげで精霊達から貰った瓶には満タンにペガの青い液体おしっこが入っていて、万が一の時には役立つだろう。私は正直、もう飲むのは嫌だけど…

（せっかくなら、ペガサスの涙とかの方が良かったな…）

なぜおしっこなのか、私は非常に疑問に思ったのだが、まあ、それがギリシャの世界なんてもありのせかいなのだろう…

しばらく走ると、大きな木々がびっしりと並ぶ森に景色が変わっていった。ペガが足を止める。最初の意気込みはどこへ行ったのか、

今にも逃げ出しそうなへつぴり腰であるところを見ていた。ダンがその視線の先を追うと、木の丸太で囲まれた防壁に、監視役であるケンタウロスが2、3人立っているのが見える。私が夢で見たのと同じ場所だ。

「普通に入れそうもないよね…、どうやって中に入るの？」

私はダンを見る。ダンは金色のたてがみをガシガシと掻き、ペガの方を向いた。

「おい、ペガ。お前その翼は消せるのか」

ペガは頷き、翼を一回大きく羽ばたかせ、消して見せた。それを見たダンの二つの青い瞳が鈍く、光る。それは獲物に狙いを定めるかのような野生の眼だった。

* * *

「よし、これで良いだろう」

ダンは満足げに鼻を鳴らした。その前には、そこら辺で拾ってきた麻布をかぶせられた優が、ペガに跨またがっている。はたから見れば、ケンタウロスに見えなくも……………？

（これはどうなんだろう…）

私とペガが同時に深いため息をついた。

「仲間だと思って近づけば、例のヘシオドスの居所も掴めるだろう…ただし、ケンタウロスは本来男のみの種族だ。優が女だとバレる

とまずいから十分注意しろよ」

「ダン、問題はそこだけじゃない様な気がするんだけど……」

ダンは優の言った事に首を傾げる。本人的には完璧な作戦の様だ。ダンは自信に満ち溢れた顔で、変装した優とペガを見送る。

「俺はここで待機する。優が俺の名前を呼べばすぐ助けに行くからな」

私は無理やり笑顔を作った後、渋々ペガと共にケンタウロスの待つ正門へ向かった。

「ねえペガ、変じゃないかしら。この格好……」

「うーん、ちょっと無理はあるけど、ケンタウロスはあまり頭の良い種族じゃないからね」

ペガも多少の不安はあるようだが、友達の為だといって怖がりながらも門番の所へ歩いて行った。

門番は二人。一人はペガより一回り小さな若いケンタウロスで、もう一人は顎に無精ひげを少し伸ばしたケンタウロスだった。このケンタウロスを優は知っていた。夢に出てきた奴だ。ヘシオドスを連れて来た二人のうちの一人である。優は唾を飲み、緊張した面持ちで話しかける。

「こんにちは、今日もご苦勞様です」

その言葉に、若い方のケンタウロスが目を細めた。

「何だお前、男のくせにやけに可愛い声をしているんだだよ。それに、話し方も少し変だよ」

「う…そ、そうだよ？」

ドクンドクンと心臓が跳ねるように脈を打つ。なんせ相手は大柄なケンタウロス二人だ。正体がばれれば、いつ殺されてもおかしくは無い。

「構わん。同士ならさっさと通せ、パシー。それに、もし町で何かすればこいつぐらい、この俺が叩きのめしてやるというものですよ…分かってるだろう、新顔さんよ…」

無精ひげに睨まれ、私は慌てて頷いた。目線を合わせただけでも、この男の方が強い事は明らかだ。右手をひらひらとさせ、通せと合図する。若いケンタウロスは素早く敬礼し、門を開けた。優は軽く頭を下げ、中へ入る。

「…よかった。意外とすんなり入れたね。ペガ」

「う、うん」

こうして、私とペガは潜入することに成功した。敵がたくさんいる中で、私たちはヘシオドスを探さなければならないのだ。

（一体私、どうなっちゃうんだろう…）

第七話 ヘシオドスの危機

誇り高き戦士であるケンタウロス。その性格は乱暴者で酒飲み、しかも酔っぱらうと手に負えないものであった。彼らは得意の狩をし、旅人を襲ったりして日々生き延びている。集落は、木材を縄で結んだだけの粗悪な家が並び、どこかの町から攫ってきた人間の女を目隠しして背中に乗せていたり、酔っぱらったケンタウロス同士が殴り合いを始めていたり。風呂敷を広げて怪しい薬や武器を並べている者もいた。それは誰が見ても汚くて下品な町だ。頼まれたつて、普通はこんな所へ好き好んで訪れる者はいないだろう……優は怯えるペガを優しく撫でてやりながら、辺りを見渡した。

門を入ったところから一本道が続いており、一番奥に、岩山を切り抜いて作られたほら穴が見える。近くまで寄ると、壁に赤い染料でケンタウロスの軍隊を描いた壁画があり、入口に動物の骨や骸骨が吊るされていた。プライドの高いケンタウロス達は、集団になると恐ろしいほどの戦力を発揮する。そんな彼らの気迫が感じられた。

「おい、むやみに老師様のほら穴に近づくんじゃないですよ」二人連れの男達が優達を睨んでいる。

「すまないですよ…」

優は声をかすれさせながらも、精一杯の低い声を出して、話を続けた。「ここは、何をする場所ですよ？」

「は、お前よそ者ですよ？ここは村の最高権力者である老師様がおられる聖域だだよ。そして地下には、人間達を閉じ込める牢屋がある

でよ」

見下した顔で男達は優に言った。優の体を下から上へと舐めるように見ている。何か金品を持ってないかチェックされているのだろうか…

「どうやったら中に入れるでよ」優は親指を立て、ほら穴を差した。

「…簡単な事でよ。貢物を持っていけば、老師様に捧げる事が出来るでよ。だが見たところ、お前のそのひ弱な腕では兎一匹捕まえる事は出来ないでよ。ふははは!!」

男達は下品な笑い声を出し、その場をさっさと立ち去って行った。彼らの去った後には、強いアルコール臭が優の鼻をかすめた。

* * *

貢物——と言われれば、思いつくのは一つしかなかった。町の外で私達の帰りを待っているはずのダンの事だ。立ち上がれば、3メートルはあるであろうあの巨体を老師様に見せつければ、両手を広げて歓迎してくれる事であろう——優とペガは片方の口を吊りあげ、ニタリと笑いあった。

「でも、もう少し情報を手に入れてからよ。上手くヘシオドスを助け出しても、逃げ道を確保しないと——正門からはおそらく無理だからね」

優の言葉に、ペガは早く帰りたいとばかりに足を鳴らした。そんなペガの首を優しく撫でてやり、優は近くで風呂敷を広げ、店を開いている年老いたケンタウロスに話しかけた。優と目が合うと、ケ

ンタウロスは、前歯の抜けた口を見せて笑った。目が外側に開いて、焦点が合っていない。優は警戒しながら、そのケンタウロスの傍まで近づいて、軽く会釈した。

「ぐへへ…兄さん、随分と若そうだねえ。わしの店おすすめの精の付くジュースでも買って行くかい？わしにはもう使えねえもんでよ。安くするでよ…」

男は腐った牛乳のような匂いのする瓶を優の前に差し出した。優はそれを不機嫌な顔で見て、結構でよ。と丁重に断った。すると男は、両手を広げてその場でくるりと回ってみせる。

「さあ、ご注文を言って下せえ。ここにはどんなものでも揃ってるでよ」楽しいにまた独特の笑い声をあげる男。優は、首を横に振って、いや、そうじゃないでよと返した。そう言うと、男は途端に興味を無くして、ふてふてしく地べたに座り、悪態について優を睨んだ。

「この町の出入りはあの正門だけでよ？」

「いや、他に小さいが東門と、あと老師様の住むほら穴の先にもあるでよ。しかしそれを聞いてどうする。素直に正門から出ればいいでよ」

「いや何…あのおっかない正門の門番に目を付けられていてね。関わりたくないのよ」優は冗談じみた笑い顔を浮かべながら言った。

「ああ、シリマペスの事か…確かにあいつはわしたちの中でも特に気性が荒い奴だな。せっかく攫ってきた人間もすぐに殺して食っちゃまう。美人の女なら、子供を産ませるまで生かしておけばいいもの

をでよ…ぐへへ…」

男の話に優は吐き気がした。人間を食べたり、無理やり子供を作らせるなんて、そんな酷い仕打ちがよく出来たものだ。ここは町が腐ってるだけでなく、住む者の心までも腐っている。優は、怒りに震える体をなんとか沈め、さらに話を続けた。

「そう言えば最近、小さな少年が一人ここへ連れて来られたんだって？」

「良く知ってるな兄ちゃん。確か山に住む羊飼いのガキだったよ。そいつの飼ってる羊たちを、老師様が欲しがっていてでよ。それで老師様の息子と例のシリマペスが直々に動いて連れて来たんだでよ。昨日から拷問をかけ居場所を探ってるそうなんだが、まだ口を割っていないようにでよ…」

男はさも日常会話の様に、すらすらと喋っている。優は、自分の下で必死に感情を抑えているペガの様子が目に浮かぶようだった。優もきつく閉じた口元をそのままに、男に手を振ってその場を去った。

ひとまず、ダンの元に帰って作戦会議だ。優はペガのたてがみをひと房握り、この町の住人全員の悪い顔を恨めしげに睨んだのだった。ペガは声を押し殺すように、ブルツと強く首を振った。

* * *

足が何百も生えているムカデが狭い牢屋の壁を這うように登っている。角にクモの巣がいくつもあり、その場所は不衛生極まりなかった。そんな中、ヘシオドスは意識を取り戻す。まだ小さい体で、何重にも縛られた縄で縛られ、地べたに座り込んでいる。赤い斑点

が足元に広がり、そのさらに上を見ていくと、体中の至るところから己の血がべったりと付いていた。昨日の拷問は朝方近くまで続いた――拷問を執行したのは昨日の白い肌の男だ――男の名前はサイバーと呼ぶらしい。一緒にいた部下らしきものがそう呼ぶのを聞いた。

「死んだかと思ったぞ。小僧」すぐ隣からガラガラ声が聞こえる。

そいつはヘシオドスよりも少し大人で、見た目の歳は16くらいだろうか――たわしの様にゴワツとした堅そうな赤髪で、袖口が広がったシャツに黒のズボンをはいている。くつきりとした二重の瞳は黄土色に輝いていた。ヘシオドスは、痛む首を動かし、朦朧^{もろう}とした意識の中、男を見上げた。

「君も、捕まったのかい？」震えた声でヘシオドスが聞いた。

「サナルエドから連れ去られてな。俺はひと月ほど前からここに閉じ込められているよ。あはははっ」

平気で笑うこの若者にヘシオドスは驚愕した。ここにひと月もいてまだ生き延びているとはまさに幸運な者だ。しかも見たところ傷一つ付いていない。これはどういう事なのだろうか……

「異世界人が暮らす町か……君、どうやって拷問を逃れているの？」ヘシオドスは額に汗がにじんだ。

「ふふ……嫌だなあ、拷問は当然受けてるよ。そればかりか奴ら、俺を何度も殺そうとしてきやがった。だから……」ここまで言って、若者は声を半音低くする。「殺してやったよ。みんなね」

口をあぐりと開けるヘシオドスに、若者は高笑いを牢屋中に響かせた。ヘシオドスがこの男に抱いたのは恐怖・奇怪・悲しみだった。何と言えがいいのだろう——この男の存在を。普遍した事実を語るその表情はどこにでもいるような顔で、その奇妙な組み合わせにヘシオドスは男の縛られた縄をじつと見つめていた。それを確認していないと、不安だったのだ——

（ああ、神様。どうかお助け下さい）

ヘシオドスは祈った。体の痛みが自身の終わりを告げている。これだけの血が流れては、きつとあと数時間の命だろう——けど、誰かが助けに来てはくれるかもしれない…ヘシオドスは、最後の時を迎えるまで、そんなわずかな希望にすがりつくしかないのであった…

第八話 老師様の苦悩

薄暗いろうそくの明かりが、ある人物を照らしていた。その男は白髪我真ん中で分けた長い髪に、同じく長く伸ばした口髭を蓄え、皮膚はしわだらけで青い血管が浮き、その小さな眼は黒を白濁して灰色になり、常に天井を見上げていた。だらしなく開いた力サカサの口。首元が開いた群青色の服には細かに獣の爪や牙がぶら下がっている。体は小さく、下半身の馬の部分である毛並みは黒と茶色の混ざった肌触りの悪そうな感じた。四本足をたたんで赤い絨毯の上にその身を乗せて佇んでいた。

その年老いたケンタウロスの前方には二人の若き兵士が片足をついて頭を垂れている。顎に少し口髭を生やしたシリマペスと、青白く不健康な顔のサイバーだ。二人の黒と白の両極端なケンタウロスに、老人が広い洞窟の中をそのしわがれた声で響かせる。

「その…例のよ…んにゃ…羊飼いの…人間は、そろそろ…ん、吐いたのよ…？」口の中でもごもごと喋りづらそうな老人に、サイバーは顔を上げる。

「はは、老師様。何度も鞭で叩いたのですが、少年は口を割りませんでよ」

サイバーの顔が、一層白くなった。横で、シリマペスが肩眉を上げて不機嫌そうに睨んでいる。

「お前の拷問が弱い…んにゃ…もつときつい拷問をかけるのよ。生死の淵をさまよえば、心の弱い人間は家畜など…取られて…ん、も惜しいとは思わぬ…でよ…」

老師様は我が息子に怪訝な顔で指差して命令した。それを聞いたサイバーは伏せ目がちに老師に反論しだす。

「相手はまだ10歳にも満たない少年…これ以上は無理ですよ…」

「サイバーよ、お前は生ぬるいのでよ。小僧など吐かぬのなら、殺しても構わんでよ」

老師とサイバーの会話に、しびれを切らしたシリマペスが口を挟んだ。その発言に信じられんとも言いたげな顔でサイバーはシリマペスを睨みつける。老師は、二人の睨みあいを片手で軽く手を振り、目を閉じて頷いて見せた。二人のケンタウロスは老師様へと視線を移す。

「おお…心優しき我が息子よ——良く聞いて…くれ…でよ」ビーズの様に小さな目が優しくサイバーに降り注ぐ。

「我々一族は今全滅の危機に瀕^{ひん}して…おるでよ。一年ほど前…近くにあの人間達の住む地下要塞・ナサルエドが出来てから、数々の同士は奴らに倒されてきたでよ。もはや食べるものもままならない——貧酷な我が村は、力の無い老人や、子供たちを養うだけの食料が無いのでよ。少年の持つ羊たちの僅かな肉でさえ…んにゃ…手を出さずには生きていけないでよ…」

老師はしばらく目を閉じ、動かないでいた。眠ってしまったのかと思ったほどに、その眼はきつく閉じられ、自身の苦悩が感じられる。そして、また言葉を続けた。

「分かってくれ、その人間の子供でも…私には憎い対象なのでよ——その恨みがこみ上げてくる…人間の一族への、んにゃ…数えきれ

ない恨みでよ…」

地獄の底から這い出すようなしわがれた声に、サイバーもシリマペスもその身を震わせた。老師の怒りが伝わってくる。

「父上、怨んではいけませんでよ…その誇り高きケンタウロス族の血を、そのような憎悪に支配されては——」

「よい…良いのでよ…ん、この話は…やめよう」

サイバーが言いかけた言葉を老師は聞きたくないとばかりに首を振って遮る。次に老師の視線は、横に居るシリマペスへと向けられる。

「シリマペスよ…例の男はどうなって…おるでよ」さっきよりも暗い影を落として、老師は言った。

「…今は牢屋でおとなしくいるようでよ、だが奴をこれ以上ここにとどめておくのは、俺は恐ろしくて…とても…」

ここまで頑固なまでに冷酷非道なシリマペスは、初めて戸惑いと恐怖を露わにした顔を老師に向けた。老師もサイバーも同じようにその顔には恐怖の色を宿している。問題の男とは、ヘシオドスが一緒の牢屋に閉じ込められている、黄土色の瞳を持ったあの謎の青年の事だ。

「だが、逃がしても復讐しにくるに違いないでよ。…我々は手を出してはいけないものに触れてしまったのかも知れないでよ…」老師の眉間のしわが深く刻まれた。筋張った両手で顔を覆う。

コンコン！！

一同が静まった中、謁見室のドアを叩く音がした。シリマペスは誰だ。と乱暴に扉をあける。ドアの傍で、きちんと手を揃えて敬礼する兵士がいる。シリマペスが睨むと、兵士は素早く片足について用を話した。

「失礼するでよっ先ほど、老師様に貢物を持ってきた他国のケンタウロスが謁見したいとのことですよ！！」

硬直した顔で話す若者は、来訪者が来た事を知らせている。老師は手を掲げ、通せと命令をだした。兵士は素早く扉の向こうへ姿を消し、そして次にはその来訪者を連れて来ていた。

「お前は、今朝の者ではないか…」シリマペスの声が少し高くなった。

そう、それは麻布の下でペガに跨っている優だ。その後ろから、縄で縛られ、目をつぶったライオンのダンがその巨体を台車に横たわって姿を現す。それを見た三人の眼が、今までにないほど驚いた顔を浮かべた。

「ほお…これはおおきなライオンだ…でよ。毛並みが黄金色に…んにや…輝いておるでよ」老師様は興奮気味に横たわるダンを眺めている。優は、満足げに鼻を鳴らし、片足について挨拶をした。

「こんにちは、老師様。貴方様に喜んでいただけよう、私が狩ってきたですよ。この獣はヘリコーン山頂上付近で、三日三晩の死闘のすえ、手に入れた獲物でございますよ」

「そうかそうか…何と素晴らしいところでよ…これだけの大物ならば、この先一カ月の食料に困る事は無いでよ…良くやってくれた。我が同士よ。感謝するでよ」

老師は少し苦しうだが、嬉しそくに喉を鳴らして笑った。

「同士よ、ありがとう。私からも感謝するでよ。今夜はゆっくりとこの村で休まれるがよいでよ。洞窟の客間を使ってくれでよ」

サイバーは優に握手し、感謝の抱擁をする。サイバーの胸に布の中でペガの頭が辺り、優は一瞬ひやりとしたが、その事を悟られぬよう、懸命に笑顔を作った。

「さあ、今夜は宴だで！！」

老師はパンと手を叩き、立ちあがると、小粋にタップしてその場で踊った。

* * *

ケンタウロスの町に夜の明かりが灯る。いつもは暗いその町も、今夜は広場に燃えたキャンプファイヤーで明るかった。火をともした前に木の棒でつながれたダンが目を閉じて吊るさせている。人々の顔もほころび、火の周りで酒や人間の女を片手に踊っていた。

「さ、好きなだけ食べるのでよ」サイバーが目のある食事をお勧めする。

優の隣には赤い絨毯に座る老師様。その斜め前にサイバーと不機嫌そうな顔のシリマペスが立っていた。時折、突き刺すような視線

を優に向ける。

(…正体がばれてるわけじゃないよね…?)

その視線に、優は胃がキリキリと痛むのを覚えた。食事の多くは山で取ってきた山菜で、酒だけは何故か山ほど樽でみんな飲んでいた。

「ところで、君の名前をまだ聞いていないな…」老師がやさしく優に尋ねた。

「はい、名前は優というですよ」老師はゆっくりと頷く。

「ふっふっふ…そうか、それは…ん、珍しい名前ですよ」

老師のまなざしは温かく、優もその眼にほっと胸をなでおろした。

「…優よ、そなたから見て…んにゃ…この村は、どう思う…?」「一瞬、そういった老師の顔が険しくなった。優は、顎に手を当てて、考える。

「…誇り高いケンタウロス達は、いつしかその心を忘れ、日々悪事に手を染めています。攫われた人間達の悲鳴が、一日中聞こえてきていました」

恐る恐る、優は老師の顔を窺^{うかが}った。老師は、目を閉じて優の話を静かに聞いていた。

「そう、かつての我々は戦士として戦場に出向き、その誇りを胸に弓を引いていたですよ——だが…んにゃ…今となつては、その弓も錆^{さび}

て使えぬばかりか、その腕も干からびていよう…」

老師様は苦いものを噛みしめた顔で、遠くを見上げた。遠い昔を懐かしんでいる。

「老師様、何故そんなに悲しい顔をするのですか。今日は宴です、晴れやかな気持ちで祝いましょう」

苦しむ顔を見たくはない。優は老師様に酒を注ぎ、飲むよう促した。

「ふっふ…そうだな、そうだった…でよ。今日の…ん、良き日に——」

「はい、良き日に——」

そう言つて優も水を手にして老師様と乾杯した。前に立っているサイバーとシリマペスも、それを見て僅かにほほ笑んだのだった。

（老師様は、この村を本当に愛しているのだわ…だから、村を救うために苦渋の策としてヘシオドスの羊たちにまで手をかけようとした…）

その気持ちが分からなくも無い——だけど、優はペガの友達であるヘシオドスを救いださなければならぬのだ。きつと今頃、あのほら穴で一人助けを懇願こんがんしているであろう少年を——

* * *

「よし、ここまでくれば大丈夫よね」

優はペガから降りた。

宴から抜け出すのは簡単だった。老師様には今日はもう疲れたので寝ますと言って、優は町の奥にある洞窟に潜入していた。まもなく彷徨って、地下への階段を降りて行くと、兵士が巡回する足音が聞こえる。

「優…僕、怖いよ」ペガの相変わらずの弱音に、優は肩眉を上げて顔をしかめる。

「友達を助けたいんでしょ。さあ、ここに隠れて」

壁が凹んだ所に、優とペガは伏せた。兵士たちの会話が途切れて聞こえて、やがてその声は小さくなっていった。

「みんな、きつと宴に夢中で警備は手薄になっているのね…これなら簡単に抜け出せそうよ」

「うつ…早く行こうよ優。さっきの兵士が帰ってくる前にヘシオドスのところへ行かなくちゃっ」

尻尾を下にしてせかせかとペガは前を歩く。

（まったく…ペガは男の子なのに本当に臆病なんだから…）

優は腰に手を当てて、浅く息を吐いた。

「ダン、無事に逃げ出せたらいいけど…」

宴の中心で祭られていたダンを心配する優。おとりになる事を、
ダンはずぐに合点してくれた。自分の事は心配いらなから、ヘシ
オドスを助け出してくれと――ダンはいつでも真つ先に自分を犠牲
にして人を助けようとする…理由が無くてもだ。そんなダンに優は
ホトホト頭が上がらなかった。最初は怖いと思ったダンだけど、関
わるにつれて次第にダンの勇敢な心に優は惹かれて行った。

「もしもの時には、必ず助けに行くからね…ダン」

優は一人、小さく呟いた。

第九話 ゼウスの事情

* * *

5つの星の模様が付いている蜘蛛が、お尻から出た自分の糸に吊るされて、逆さまにブランと揺れている。蜘蛛の視点から見ると、目の前には大きな黄土色の目玉がふたつ、此方を凝視していた。蜘蛛は警戒し、逃げるように糸を手繰り寄せる。次の瞬間——パチッと焦げる音がして、蜘蛛は動かなくなってしまった。動かなくなつた蜘蛛からは、香ばしい匂いが漂う……

「……」

顎を突き出し、調理した蜘蛛を一口で、口に運ぶ。そいつは、モグモグと口を動かしながら、眼球だけをグリーンベレーの少年へと向けた。

男が目を向けると同時に、ヘシオドスは男から視線を外す。すっかり青ざめた少年の顔が、険しくなっていた。息をするのも苦しそうにしている。

ここは、再び牢屋の中である。今頃……優達がこつそりと助けに来ているのだろうが、そんな事をヘシオドスは知る由もない。現実、謎の青年が、たった今……何故か焦げてしまった蜘蛛を平然と食べている。そして、今、ヘシオドスの事を怪しい目つきでニタニタとしながら見ているということ、それだけだった。

会話も無く、しばらく静かだったのだが、それを破いて赤髪の青年が口を開いた。

「……死ぬのが怖いか」

笑いの混じった声で、青年が問いかける。ヘシオドスは、硬く眼を閉じ、コクント頷いた。

（あたりまえじゃないか——でも——僕は君の方がもっと怖い…）

「ふん、俺の方が怖いだと？お前は変わった奴だな。安心したまえ、俺は無駄な殺生はしない…お前を殺そうとは思わんとも」

「っ…！！」

ヘシオドスはパチンと音を立てて、両手で口を抑える。確かに心の中で呟いたのに…何故聞こえたのだろうか…顔の血の気も引いていくのを感じながら、ヘシオドスは赤髪の男を見た。

（こいつ、何者なんだ）

「…お前の感情は駄々漏れだな、ヘシオドスよ。君は神の使い手でもあるんだ、この俺が何者なのかは、きっと分かるはずだよ」

赤髪の男は苦笑しながら、腕を組み、ヘシオドスに当てて見ると言ってきた。

「…分かりました、少し待って下さい。神経を集中する必要があります…」

ジワリと汗の滲んだ手を組み、目を閉じる。ヘシオドスは、ペガが言っていたように靈感と言われる能力があるのだ。やり方は簡単、ただ目を閉じて2、3秒すると、発動する。瞼の裏に周りの景色が、オーラの色を纏って見えてくる。そのモードでは、その者の本来の

姿が見えるし、感情などもオーラの色によって分かる。いわば、第二の目があるのだ。

（はっ——こ、これは……）

ヘシオドスは衝撃を受けた様に飛びはね、赤髪の男を見ている。

「…見えました。ああ、でも自分の目を疑ってしまうようなお姿です」

「いや…確かに君の第二の目には、本当の姿が映っているはずだ」

「…あ、あなたは……いえ、あなた様は……」言いながら、ヘシオドスはごくりと唾を飲む。

「オリンポスの神々の王……ゼウス様ですね……！！」
「いかにも」

シューウウウウウ……！！

ヘシオドスが名前を口に出すと、赤髪の男にたちまち煙が立ち込める。姿が見えなくなつて、中から野太くなつた豪快な笑い声が聞こえてきた。

「礼を言うぞ、ヘシオドス。君のおかげで元の姿に戻つた」

「あなた様が、何故こんな所に……それに、何か呪いをかけられていたのですか……？」

「ああ、そうだとも。私の愛する妻のヘラがな……なに……あいつは嫉妬深いために……少しの事でも怒りよる。あつはつはつは……！！！！困つたものだろう？」

「また、地上の女性に手を出されたのですね……ゼウス様。それでヘラ様に罰を与えられ、あのような姿に……なるほど——あなた様の浮気癖のお噂は、この地上にも知れ渡つております」

ヘシオドスは呆れた様な、悲しい様なそんな声を出した。

煙が収まり、ゼウスの姿が露わになる。——体が大きすぎて頭が天井に付いてしまつてゐる。

良く焼けた黄金色の肌に、真っ白な歯で愉快に笑うゼウス。肩に金色のワツカをはめていて、上半身は裸。下半身は煌びやかな刺繍が入ったズボンを履いてゐる。

「なんだでよっ！！騒がしのでよ……って……でええええええ！！！！」

ゼウスの豪快な声で様子を見に来た監修が駆けつけてきた。ゼウ

スの姿を見るなり、目を丸くして驚いて逃げて行く。

カチャン――

牢屋のすぐ傍に、古びた鍵が落ちた。ケンタウロスが慌てて、鍵を落としていったようだ。ゼウスがその長い腕で小さな鍵を掴み、ヘシオドスに放り投げる。

「…ケンタウロス達に騒がれると面倒だ。私にはまだやらなくてはいけない仕事も残っているしな…」

ヘシオドスは、ただただ――目の前にいる神々しく光るゼウスに驚くばかりだ。開いた口が塞がらない。

「君の体を少しの間貸してほしい、良いかな？」

「へ……？あつ――は、はいっ！！」

「はっはっは、良い返事だ。よし…では力を抜いていてくれ」

「はい！！」

ゼウスは体を変化させ、霧状の塊になった。そして、ヘシオドスの体へと入って行く。すべての霧がその小さな体にすべて入ると、ヘシオドスは意識がだんだんと遠のいて行った。

一呼吸あけて、ヘシオドスの体が動き始める。見た目はヘシオドスのままだ。

「うむ、力はやはり随分と弱くなったが…上手く融合したようだ」

ヘシオドスの幼い顔つきで、ゼウスは満足げに笑った。ヘシオドスの精神の方は、眠ったようだ。

「さて、早くここから出ないとな…」

* * *

ヘラの奴、俺に呪いをかけてしまうとはなんて鬼嫁なのだ…まったく、おかげでケンタウロスなんかにはめになったのだぞ。仕事も溜まってきている。用事を済ませて、早くオリンポス山に帰らねば――

ゼウスは鼻歌混じりに監視員の落としていった牢屋の鍵を使い、脱出する。出口を探して周りを見まわしていると、前からひそひそと話す声が聞こえた。

「なんてこった。もう追手が来たのか…？」

ゼウスは軽く舌打ちをし、声のする方を見て構える。遠くの方に二つのシルエットが見えてきた、しかしどうやら様子がおかしい。女の声に、馬の鳴き声がする。

(…敵か…？それとも――)

「誰だ!!」

俺の声に反応して、二人の動きが止まった。俺も近づいてみると、二人の顔がだんだんとほころんでいく。

「あなたっへシオドスね!？」

「へシオドス!!良かったっ無事だったんだね!!」

小柄な女と、ペガサスだ。同時に俺に抱きついてきた。ゼウスはびつくりして体を上ずらせる。

「な、なんだ!!」

「あなたを助けに来たのよ、へシオドス!!私…優って言いますっあなたを助けに来たの。大丈夫!!味方だから——ああっ酷い傷じゃないっさあ、すぐにこれを飲んで」

優は早口でまくし立てる。興奮して俺は上手く聞き取れない部分もあったが、とにかく俺の無事に心から嬉しがっているようだ。

優は、ポケットから青い液体おしっこを取り出した。ペガはそれを見て、照れ臭そうに顔を赤くしている。

（女と子供だけで助けに来たのか…?なんて無鉄砲なんだ——やれやれ）

「傷を治す薬かい？」

「ええ」

優は短く返事を返し、再び飲むよう促した。この流れでは仕方が無い…飲む。俺は瓶を傾け、一口飲んでみる。

すると、みるみる内に鉛のような体が軽くなり、傷が塞がれていく……

「おお、本当に治ったぞ」

「えへへへへ」

「で、これは何で出来ているんだ？優」

「僕のおしっこだよ！..」

「.....なに」

「..」、ごめんなさい。でもそれを言ったら飲んでくれないでしょう？えへへ...」

褒めて、と言わんばかりに歯を見せて笑うペガに、申し訳なさそうにする優。二人の顔を交互に見るゼウスの顔は、すっかり青ざめていたのだった。

「なんてこった。まいったな...」

聞かなければ良かった——俺はガシガシと頭を掻き、平常心を必死に保つ。

「ねえ、ヘシオドス。あなたここまで脱出してきたの？」

「ん？ああ、まぬけな奴が鍵を落として行ったんだ」

そう言っただけ俺はウィンクして見せる。

「さあ、じゃあ3人でここから脱出しようか」

「……」

そう言った俺の言葉に、優は暗い顔色で俯く。

「ダンなら大丈夫だよ、優。あいつなら一人で逃げ出せるさ」

ペガは優の傍で翼を広げて明るく言った。そんなペガに、優は悩ましげな表情を浮かべて頷く。

「もう一人、仲間がいるのか」

「うん、でも凄く強いから大丈夫さ」

ペガは優の様子を伺いながら、俺に返事をする。

（まあ、大抵の奴らは雑魚ばかりだが……油断できないのも一人いる……そいつに見つからなければいいが……まあ、現状——こつちも時間の問題だ。はやく逃げないと捕まっちゃう。ダンには悪いが、そつちに構ってられそうにもないな——）

「優、ペガもそう言っているんだ。心配なのは分かるが、今はとにかく脱出しよう？」

優は俺の方を見る。口をきつく閉じて何かを我慢しているようだが、それを飲み込むかの様に、ゆっくりと頷いた。

第十話 ムーサの女神テルプシコラー

「出口は？」

ゼウスと優達は息を切らしながら走っていた。ゼウスの問いかけに、優はその大きな目と耳を動かし、此方に顔を向ける。

「ほら穴を出てすぐ右に東門があるのと、ここさらに奥にもあるわ」

「外へ出るのは目立ってしまう、ほら穴の奥の出口を目指そう」

「そうね、でも道が分からないわ。ほら穴はまるでアリの巣の様に枝分かれしているの」

「それなら大丈夫だよ、道は僕が全部覚えているから」

ペガ言葉に、二人が同時に振り返る。嬉しそうに尻尾を振って、手招きしているのを見て、また同時に息を吐いた。

「偉いぞ、ペガサス。案内してくれ」

「うん!!」

* * *

日の当らない牢屋を出て、ペガの案内で出口へ急ぐ一同。どれぐらい時間が立ったのだから——焦っていると時間が立つのが早

いように感じる。いつ来るかわからない追手に、俺の心臓はバクバクと音を立てていた。ここまでケンタウロス達には見つかったくない。というより、そんな気配すらしない。何故だろうか――？

（嵐の前の静けさのような……なんだか生きた心地がしない……この体じゃ、力は少量しか出せないし、たとえ力を使っても、優達に俺の正体がばれるのも避けたい――）

ゼウスは心の中で大きくなる不安を抱えながら、走っていた。しばらく行くと、おもむろにペガの足が止まる。よそ見をしていた俺は、勢いをそのままにペガにぶつかった。

――ガン――！

「いつてー！ー！おい、ペガサス！ー！何で止まるんだよ！？」

ペガはビクツと体を揺らし、後ろを振り返った。

「無理だよ、ヘシオドス。これ以上は進めない」

「あ？」

前を向くと、大きな門が立ちふさがっていた。門の取っ手に、大蛇の彫刻がほられている。

「……この扉の向こうが、出口なんじゃないか？」とゼウス。

「この大蛇、何だ那不気味だわ」

声を上ずらせて言った優は、門の大蛇を触ろうと手を近づけた――

「…っあ！！待て！！！！触るな！！！！」

ゼウスは大声をあげて優を止める。優は驚いて悲鳴を上げると、後ろに居る俺へと顔を向けた。ヘシオドスになっている俺はその時、第二の目を開いていた。

「その大蛇は、生きている」

俺がヘシオドスの目で見えたもの、そこに確かに大蛇が息をひそめているのが写っていたのだ。目を細め、獲物を待ちかまえている。恐ろしい石像の大蛇だ。

——シュー…シュー…

正体を見破られた彫刻の大蛇は、するすると動き出す。シャーッと優達に威嚇してやり、逃げるように洞窟の奥へと去って行った——
——優とペガは青白い顔で肩を震わせ、大蛇の去って行くのを見送った。

「ありがとう、ヘシオドス。危ういところだったわ…あの蛇の正体がわかったのはあなたの能力？」

俺の方を振り返った優がお礼を口にする。その漆黒の目は尊敬の眼差しを向けていた。

「ああ、そうだ。第二の目があれば、どんなトラップも見破れる。おそらくさっきのは魔法がかけられていたんだ。侵入者に対する、ケンタウロス達の罠だろう…」

（そして、ケンタウロス達の中に、魔法を使えるものがあるの——
——これで証明されたわけだ。ありがたい事に、今…俺達がそいつに会えば、勝てる見込みはゼロに近いだろう…）

それにしても、^{ヘシオドス}本体の能力は使えるな。ペガと優の‘本当の姿’もはつきり見えた。ペガはあの伝説の天馬ペガスの生まれ変わりだ。まだ子供だが、内に秘めている天性はきつと爆発的な力を秘めているだろう…属性は炎だな——ギリシャの国でもっとも多い属性だ。そして優——これには俺は驚いた、まさか…帰ってきていたとは…いや、この話はまだ先の話だな。今は止めておこう——

「ヘシオドス、ヘシオドスってば！！」

「あ？」

優は俺の腕を引っ張り、怪訝な顔をして覗いてきていた。物思いにふけて、我を忘れていたようだ。

自分が今はヘシオドスだという事を、ゼウスは一人で納得して、優に返事をした。

「もう、急いでるんだからね。ヘシオドス」

「ああ、すまなかった——っと、ここは…」

ペガが扉を開けたその先には、外の景色は無かった。代わりに、四本の柱で屋根を支える祭壇が祭られていたのだ。祭壇の中央には、綺麗に装飾された棺桶くらいの箱が置いてある。

「この箱、錠が掛ってるよ。中に何か入ってるのかも」

俺は第二の目で箱をしてみる。特に変わったことは見つからなかった。

「この錠、パズルになってるわ。私、こういうの得意なの。待って、すぐに解除してみせるから」

四角い形の錠は、何か絵が描かれているようだ。ばらばらの位置にあるピースを、優は力チ力チと当てはめて行った。

「出来た。これは――たてこと 竖琴だわ」

優がそう言ったのと同時に、カシャンと音がして、錠が外れた。

「開けて――見る？」

「ああ」

ペガは早くも逃げ腰で、優と俺の後ろにべったりと張り付いた。うっとおしいのでペガを足で蹴って引き剥がす。だが、ペガも負けじと俺の体にまとわりついてきた。咎めるような視線をペガに送りながら、俺と優は一緒に箱を開け、中を覗いた。

「なにになに????何が見えるの????どうしたの――!!!!!!」

ペガは俺の耳元でバカでかい声を出し、一人パニックになっている。

「うっせえペガサス!!!黙ってられんのか、お前は!!!」

俺が怒ると、ペガは寂しそうな顔で耳をしぼませた。

「ヘシオドス、前まではもっと優しくかったのに……」

口を尖らせ拗ねるペガは、恨めしげに俺を睨んだが、俺はそんなのかまっていられないので無視だ無視。さて、そんな事より箱の中だ——箱の中には、なんとも綺麗な少女が横たわっていた。白いワンピースに栗色の長い髪が、腰のあたりまで垂れている。手には豎琴を握っている。部屋の隅にある松明の僅かな光で、箱の中の少女は眩しそうに目を覚ました。

優は、そのあまりの美しさに、ごくりと唾を飲み込む。

「ヴァターシ、ずっと眠っていたの——？」

なまった様な発音で、少女は第一声を発した。周りをぐるりと見渡し、目をクリクリとさせている。

「この箱の中に、閉じ込められていたんだよ。キミ」

少女の目線が、第二の目を開く俺へと向けられる。

「…アナータ、ゼ…」

「おっと、それ以上は言うなよ。テルプシコラー」

俺は慌ててテルプシコラーの口を塞いだ。

「テルプシコラーって、アポロの支配下の娘達だよな。ケンタウロ

ス達に捕まってたのか——あとの8人はどこに居るの？」

テルプシコラーは、本来パルナツソス山に住むムーサと呼ばれる9人の音楽の女神達の事である。女神達にはそれぞれ楽器を持っており、彼女達の音楽で人々は幸福を感じるといふ——ペガの問いかけに、テルプシコラーは顔を曇らせた。

「それが、分からないの……いつものように、アポロとヴァターシ達と一緒に演奏を楽しんでいると……あの方」が、やってきて……」

ここまで言うと、女神は体を小さくして、震えだした。恐ろしいものなのだろう……その時の事を思い出したかのように、恐怖で顔が引きつっている。

「いいの、無理に思いださないで……私達と一緒に逃げましょう？ 出口は分かる？」

優は優しく話しかけた。その包み込むような表情に、テルプシコラーは少し緊張をほぐす。

「ええ、あの隅にある松明を右へ傾けると、隠し扉があるの。そこから出られるわ」

テルプシコラーの言うとおり、俺は松明を右へ傾ける。すると、岩の外壁の一部が後ろへ下がり、土埃と共に外の光が現れた。

3人は喜んで顔を見合わせる。

「良かった、これで出られるわね」

「よし、ペガ。女神を背中に乗せて、安全なところまで連れて行くんだ」

「う、うん。でも…」

ペガは、あいまいな返事をする。

(…?)

なんなんだ、こんな時に。ペガは俺の後ろを見つめて、突っ立っていた。なかばイライラしながらも、俺は後ろを振り返ってみる。

「…おっと、こりゃまいったな…」

逃げている途中に感じた、嫌な予感は的中したようだ。

俺達が入ってきた入口から、完全に武装して、弓や槍を持った者たちが獣臭と酒の匂いを漂わせて立っている。

「ここで、…ひつく…うあー、何をしているでよ？」

恐ろしく低い声をだした人物が一人、じりじりと此方へ歩いて来る。真っ黒な毛並みに真っ黒な肌、ギラリと血走っている目が、3人と、女神に向けられている。そいつはケンタウロスの、シリマペスだ。その後ろに3人ほど、ガラの悪そうな連中を連れている。どいつもみんな祭りで浴びるように飲んだ酒でふらふらになっていた。

女2人に馬一匹。そして少年の姿の俺だ、さて、この状況で戦闘開始か——だが、やるしかない——！！！！

「…上等じゃねえか、神様——なめんなよ…?」

第十一話 ケンタウロスとの戦い

シリマペスは3人の兵士に指示を出す。兵士たちは左右に広がって走った、それが敵の第一手だ。それと同時に、こちらも行動する。

「最初の、一手だ!!」

——ペシ!!

俺はペガの尻を思いっきり叩く。ペガは涙目で大きく鳴き、女神を乗せて空に飛んで行った。これでこの場に残るのは、俺と優だけだ。

「ちっせつかくのおもちやを逃がしやがって…ガキが」

「シリマペス、神の者に手を出してただで済むと思ってんのか？つかお前ら、酒くせえんだよ!!」

兵士たちが俺達を囲み、じりじりと近づいてきた。

「ねえ、どうしよう…」

優が不安げに俺を見つめていた。

「下がってる優、こんな雑魚どもなら大丈夫だ」そう言って俺はウインクしてみせる。

「聞こえてるぞ、なめた事を言ってくれるじゃねえか——お前らつかかれ!!」

ヘシオドスの掛け声を合図に、両サイドに居る兵士が槍を構えて突進してきた。ゼウスは軽々と飛び上がる。兵士達がかち合い、お互いの頭をぶつけた。酒がまわったのか、ふらふらと体を回らせ二人ともその場に倒れ込んだ。

「く…おおお…！」

正面にいる兵士は動揺して、弓矢を放つ。

「ふん、遅いな」

ゼウスは矢をヒラリとかわし、敵の懐に入り込んだ。

「うわああ」

慌てて兵士は弓をやみくもに振りおろした。ゼウスは手の甲で受け流し、反対にその弓で兵士の腹を突いた。

「ヴ…うええ…」

真つ青になった兵士は嘔吐しながら、床に倒れ込んだ。後ろに居る優は、逆にあっけにとられて口をあぐりと開けていた。

「やっぱりかなり弱いじゃねえかよ…いつら…つか酒くせえし、戦いどころじゃねえだろっ舐めてんのか…！」

シリマペスは首を振り、見ていられないとばかりに手で顔を覆った。

「ふふ、ガキのくせになかなかやるようだな。とりあえず…仕切り直しでよ、お前なんぞ俺一人で十分だよ」

「そう言うお前も酒くせえんだよ、どんだけ盛り上がったんだその宴会——なんか逆に気になるわっバカ野郎!!」

俺は突っ込みを入れるが、シリマペスは耳を塞ぎ誤魔化する。

「ごちゃごちゃとうるさい奴だよ、一族の中で一番の戦士と謳われる俺に勝てると思ってるのよ?」

「ヘシオドス!!」

(!!)

優が倒れた兵士から槍を抜きだし、俺に放り投げてきた。武器を受け取った俺は、いつもの不敵な笑みを浮かべ槍を構える。

「…来いよ」

挑戦的な態度でシリマペスに余裕をかます俺に、奴は眉間にしわを寄せ、怒鳴りながら襲いかかる。

「でえ〜よおおお!!」

「…お前達はいつもそうやって突進してくるばかりだな、面白くないんだよ」

ゼウスはため息を漏らし、身を屈めてシリマペスの攻撃をかわした。

「なに!？」シリマペスは驚いて、ゼウスの方を見た。不気味に光るゼウスの槍が、シリマペスを捕えている。

「…お前が一番強いだと?」

ゼウスは、静かに口を開いた。槍を短く持ち、シリマペスの右足にぐさりと刺す。

「ぐおおっ」シリマペスは苦しみの表情を浮かべ、倒れ込む。

ニヒルに笑いながら、俺はとどめを刺すために槍を奴の心臓へ振りかざす――

「…っ止めて!!ヘシオドス!!」遠くで、優の叫び声が聞こえる……

――キイイイン!!

(な、なんだ!!)

俺は訳も分からないまま、突風が体に当たった様に吹き飛ばされた。岩壁に背中を強打する。

「いつて…なんなんだ」

頭をかばいながら、俺はゆっくりと起き上る。

「ヘシオドス…っあいつの様子がおかしい――第二の目で正体を見て!!」

優の怯えた声に、俺はシリマペスを第二の目を開く。

「これは…なるほど。あいつの悪事すべての原因はお前だったのか…」

正体を見た俺は、思わず冷や汗が出るのを感じた。シリマペスの背後に、インプが居たのだ。体は小さく、全身真っ黒。鉤^{かぎ}の形をした尻尾が生えている、悪魔の一種だ。

「インプか…人間の闇に住みつき、悪事を働くお前達は何故、ケンタウロスにまで取りつく事が出来たのか——それは多分、ケンタウロスが人間を食べるようになり、それを經由してお前達が奴の体内に侵入した。大方そんなところだろう…?」

「ケケケケケ…ニンゲン…クウ…コイツラ、ワルイ」

「何か…恐ろしい声が…聞こえるよ、ヘシオドス!!」

優はゼウスの腕にしがみついた。

「ああ、優には聞こえるだろうな…だが、大丈夫————っと言いたいところだが、へへ…こいつは俺の専門外だ。どうにかして逃げるしかねえな…」

「ギャギャギャギャ!!!」

インプはけたたましく鳴き、ゼウスに突進してきた。素早い動きで、もう避けられそうにない。

(…しまったっ 食われる!!)

—— ブシ!!

「ぐ…あ…」

「ヘシオドス!! いやあああ!!」

俺の右肩が、直径10センチほどの半円を描いて大きくくり抜かれた。俺は微量の電気を流し、皮膚を焦がせて止血をする。優は悲鳴を上げ、今や恐怖と悲しみで目から大粒の涙を流している。

「オマエタチ…クウ…ワレ…マタツヨクナル…ギャギャギャ!!」

笑い声のような雄たけびを上げて、インプは再び襲いかかってきた。

「くそっ 優…伏せろ!!」

「……っ 許せない… 悪魔め——!!」

真っ赤になった目で辺りを見渡し、優は叫んだ。

「… 優!!」

インプが優の方へ向かって、大きな口を開けて突進している。俺は優の手を掴んだ。

—— ポオオン…… ——

「……な」

「へ……」

俺が優に触れたと同時に、辺りが静かになった。俺と、優以外。動いていない…不思議な感じた。まるで、時間が止まった様に――

「インプが…見える」

優の顔の前で、口を開けたまま、インプは動かなくなっていた。

「おい、俺達の体…何か光ってねえか？」

俺は自分の両手を見て言った。優も同じように驚く。

「――きつと俺達の力が連動して、時間を止めたんだ…優、君にも何か力が宿っているに違いない」

「…わ、私に？何の？」

「さあ、それは分からない――だけど助かった。この隙に逃げよう、ほら…行くぞ」

「……」

俺は起き上り、入口へ足を進める。だが、優は付いてこないで、その場に立っている。

「どうしたんだ、優」

優は神妙な面持ちで、インプを見つめる。

「インプを、このまま放っておいたらまた悪さをしでかすわ…」

「ケンタウロス族は俺達を襲ってきた悪い奴らだぞ？」

「ええ、でも…倒す方法はないの？」

「…はあ、全く…時間だっていつまた動き出すか分かんねえってのに…」

文句をつらつらと言いかけたが、優は有無を言わさぬ態度で此方を見つめる。頑固でまっすぐな娘の様だ——俺は諦めて、話を進めることにした。

「そうだな、実はインプには俺は触れる事すら出来ねえ…優、だが異世界人であるお前ならこいつに触れられる。こいつの心臓を刺すんだ、そうすればこいつは地獄へ戻る。だが、お前に出来るか？」

「…できるわ、あなたのその肩の仇を取るためにもね…」

優の言葉に、俺は思わず笑みがこぼれた。優は転がっていた槍を持ち上げ、構える。息を吸い、吐く——そして、槍をインプに深く突き刺した。インプは黒い炭になって、粉々に崩れていった——

「…これで、終わり？」

「ああ、そして…本体の方も…」

——ポワン

一瞬、胃が浮いたような感覚になり、それから辺りの景色が動き出した。時間が元に戻ったのだ。ゼウスは、シリマペスの方を向いている。優もそちらへ視線を動かすと——シリマペスは穏やかな顔になって、動かなくなっていた。

「…死んでしまったの？」

「ああ…あいつは、インプに魂を食われてしまった。だから…」

俺は優を見て驚いた。涙を流していたのだ。

「なぜ、敵の為に泣く…怖かったのか？」

「いいえ…違うわ…シリマペスは確かに悪人だけど…死んだら悲しむ人がいるわ、その人の悲しみを思って——涙が出るの」

「……そうか」

（綺麗な…涙を流す女だ——）

俺はそう思った。人のために涙を流す、思いやりがなければできない事だろう……思えば、インプに良いように操られたシリマペスも、哀れな奴だった——

「急いで、ここを出よう…行こうか、優」

「うん…っ」

優は流れる涙を強引にひと拭きすると、ゼウスの差し出した手を取り、走り出したのだった――

*
*
*
*

第十二話 ダンとヘシオドス

「急げっ優!!」

「ちょっと待ってよ、く…なんだか足が重いわ…っ」

（優…さっきので力を使ったせいかな…？）

ヘシオドスと優は全力で森を下って行く——老師様の洞窟は遠くの方で見えるようになった。横に川が流れている。

「あてっ」

——ズサンッ

優は足をからませ地面に転んだ、俺は舌打ちをし優に手をズイと差し伸べる。

「…ほら、手——つなげよ」

「う、うん」

黒の瞳を見開き、それから優は少し頬を赤らめて——ヘシオドスの差し述べられた手を掴んだ——その時。

——オーオオオオー!!!!!!

（!!!!!!）

地響きのような声が森に響いた。追ってきたケンタウロス族の雄たけびだ、4、5人どころじゃない…おそらく何百人もの大勢の声だ。ヘシオドスは優を引っ張り走り出す。

「やっべえぞっ完全にバレてるよ俺達が脱走したこと!!」

「はっはっは…へ、ヘシオドス…私の事は良いから…」

「んなこと出来るかつ目覚めが悪いわ!!」

「…うつ…ごめんね…はあ…はあ…」

優の体力はもう限界の様だった。腰を曲げて引っ張られているヘシオドスに何とか付いて行っている…ヘシオドスにも焦りの色が見え始めた、このままじゃ二人とも捕まっちゃうかもしれない。

ピュ——!!

「あれはっ」

「っ!!ああっ助かったわ…ペガよ!!」

二人の上空に大きな翼をはためかせ、飛んでいる影が見えた。優がその生き物の名前を叫ぶと、向こうも此方に気が付き、純白のペガサスが舞い降りてくる。

「優っ!!ヘシオドスー!!」

ペガは満面の笑みで此方に駆けてきて、優の胸に飛び付いた。

「あはは！！良かった、二人とも無事だったんだね！！女神さまは安全なところを見つけたから、そこで降りてきたよ」

「そうか、偉いぞペガサス」

俺はペガのたてがみをワシヤワシヤと撫でてやった。ペガは嬉しそうに足を折り曲げて座りこむ。

「さあ、乗って！！」キリリと目を鋭くさせ、ペガの顔が引き締まった。

俺は優を前に乗せ、抱きこむようにペガのたてがみを掴む。優は体をちぢ込ませ、少し落ち着かない様子だったが、今はそんな場合じゃないだろう…。？と俺は首を傾げた。二人とも乗ったのを確認して、ペガは翼を広げて足を一蹴りし、空へ舞い上がる。風が冷たく気持ちいい…。ペガは左へ旋回し、追手の様子をうかがう。

「あれ？あそこ…もしかして、ダンかな…？」

「ええ！？」

森の木が邪魔でチラチラとしか見えないのだが、米粒のような大勢のケンタウロスに追われ先頭を走っている人物がいた。黄金の鎧に盾と槍を持ったライオン——あれはまさしくダンだ。

「ペガちゃんっすぐに引き返してダンを助けに行きましょう！！」

「ええ！！でも、僕——ダンを乗せられないよーっ」

「やるしかないの！！お願いよっペガちゃん！！」

「おいおい…あんな巨体ペガサスじゃさすがに無理だぞ…」

すると優は俺とペガを思いっきり睨みつけてきた。噛みつかれそうな勢いだ——精一杯の大声で叫ぶ。

「ダンを見捨てられないの！！仲間なんだから！！！！！」

「…優…分かったよっ」

ペガは優のものすごい剣幕で引き返し、スピードを上げダンの方へ向かう。優はその身を乗り出し、手を伸ばす——俺は優が落ちないように、腰に手を回し優を掴んだ。

（小せえ腰だな…この体でも十分腕が余るくらいだ…）

俺は半ば感心しながら、目の前に迫ったライオンを見る。ダンはこっちに気付いて手を振っていた。

「一応、第二の目で見てみるか…ん？人間…？」

俺の第二の目で見た奴はライオンの姿ではなく、金色の長い髪を生やした美しい男だった。

「ダンーーーー！！」優はダンの名前を呼ぶ。

「優、待て！！そいつは……」

畏だ——と思った俺は優の体を引き上げ、代わりに自分の体を下へ放り投げた。

「……!! ちょ、ヘシオドス!？」と優。

優の驚いた顔が上に見える、俺は土埃をあげながら、ペガから落ちてしまった。

「なんだこいつ——ってヘシオドス!？こんなガキだったのか……」

地面に叩きつけられた俺の顔をライオンが覗いて来て言った。

「む……失礼な奴だな、お前」

——ザス!!

「ヒヒーン!!」

ケンタウロス達がすぐそこまで迫ってきていた——その内何人かの兵士が放った矢の一本が、ペガの足に刺さる。悲鳴を上げたペガは再び高々と飛び上がる。興奮するペガに振り落とされそうになり、優は甲高い声を荒げてしがみ付き、優とペガは遠くへ飛んで行ってしまった。

「あ、おいこら!! 俺を置いてくな!!」

「ちっ仕方ねえな……おい小僧、戦うぞ」

「は!?! 無茶言つなよ……どんだけ敵の数多いと思ってんだよあんたっ」

「……お前、何で自分から降りて来たんだよ」

透き通った様なブルーの瞳が俺を睨んだ。

「け…俺は、確かに見えたんだ。あんた、人間だろ？」

「…！！なんでその事を…」

ダンは驚いて槍を俺に向けた。首元に、銀色に輝く刃が付きつけられている。

「…お前、敵か？」と俺が問いかける。

「ほお、助けに来てやった俺に随分生意気な口聞くじゃねえか——ガキがっ」

首を傾げてダンは目を細める。

（どうも怪しい奴だが——考えればケンタウロスに追われている時点で敵ではない——か…にしても、この状況でこの落ち着いた物腰…ただものじゃねえな…）

俺は返事の代わりに、ニヤリと笑って見せる。するとダンも、両端に生えた牙をちらつかせ大きな口を開け笑ってみせた。後ろで追いついたケンタウロス達が、二人を囲むように陣営を立てている。

「…話はあとだ、お前…戦えるのか？」

「ああ…」

「じゃあ、これ使え」

そう言ってダンには腰に付けた短剣を手渡す。巨体のダンには小さいが、俺が持つと立派な長剣だ――柄にライオンの紋章が描かれている。

――グルルル……

ケンタウロス達の、獣の唸り声が森の茂みから聞こえる。あちらは陣営を完成させたようだ――すっかり取り囲まれている。

「…来るぞ!!」

ダンもケンタウロス達の声を覆いかぶすくらい大きな雄たけびを上げ、戦闘が始まった。

* * *

「ヘシオドス!! 離れてろっ」

ダンは槍を平行に構える。ぶんぶんと扇風機のように回し、突風が吹き荒れる。

ケンタウロス達は何人が吹き飛ばさせて言った。

「くられ…竜巻!!」

高速で回転した槍で兵士たちへと突進する。

ケンタウロス達は次々と飛ばさせて、悲鳴を挙げた。

何十人もやられる仲間を見て、後ろに控えるケンタウロス達がヘシオドスの方へ視線を向けた。

「け、…猛獣と戦うよりも、そりゃ俺から言った方が楽ってかい…？」

俺はニヒルな笑いを浮かべると、目を金色に輝かせ、向かってくる兵士たちに構える。

「雷神」

ドンー！！

俺の周りに、雷が落ち——円を描くように地面がえぐりだされた。焼け焦げた兵士たちの残骸が転がる。

「ひいいいっこ、こいつら…化け物いでよ！？」

怖気づいたケンタウロス達は、一目散に逃げ出して行っただ。

「やれやれ、あれだけの大人数できて、たったの数秒で降参か。伝説の怪物も大したことないな」

「あんた、やるじゃないか。大きな巨体に似合わず、すばしっこい動きしてる」

ダンは背中に槍をしまいながら、苦笑いして見せる。

「お前の方こそ、ただのガキじゃねえな。なんなんだよ、さっきの雷。どうやった…？」

「ふん、お前には関係ないさ。それより、あいつらたぶんまた襲っ

てくるんじゃないか？」

「ああ、あんな雑魚どもじゃ話にならんが、他にちつとやばい奴がいる。長老の側近だ」

「ああ、シリマペスの事か？あいつなら死んだ」

「…なに…？」

俺の言葉に、ダンは顔を真っ青にして食いつく。

「そりゃ、大変なことになった。もう一人、側近でやけに頭の切れる奴がいたんだ。真っ白な長い髪の男…仲間を殺されたと分かれれば、必ずかたき討ちに来るだろう——」

「…強敵か」

「ああ…たぶん」

ダンは考え込むようにあごに手を当てる。

「…まあその時はその時だ。それより、先に山を下りて行ったペガと優に追いつこう。いくぞ、ダン」

「ああ、そうだな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2957p/>

ギリシャの異世界

2011年10月8日10時31分発行